ふるさとを離れる

三木俊平

「田舎の家を売ることにした」

昨年の秋、老人保健施設に入所している母を見舞ったある日、私は意を決して伝えた。

「……。私の帰る家が無くなるなあ。……。昔の人が生きていれば怒るやろ」

九十七歳の母は、諦めきったようにこう言って、居室の天井を見つめた。

私は兵庫県の北東部、京都府境の山あいの町で生まれ育った。そのふるさとを後（あと）にして五十年が経つ。この間、過疎化、高齢化、少子化という抗いきれない時代の流れと無縁ではなかった。

年々、人口は減少し、高齢化率も五十パーセントに達している。一人暮らしや高齢者世帯は増え続け、空き家も目立つ。母校の小学校は全校生が三十人前後にまで落ち込み、完全複式学級となった。農林業経営が厳しいなか、耕作が放棄されて雑草が生い茂る田畑や、手入れの行き届かない里山も目につく。

集落の人たちは、今日までふるさとをひたむきに守ってきてくれた。その思い入れや一つひとつの取り組みに、感謝の気持ちでいっぱいになる。しかし、誰しもの予想を大きく超える人気（ひとけ）のない寂しい風景が広がり、ついついため息が出てしまう。

子どものころの農繁期。雨がしとしと降るなかでする田植えの手伝いは、惨めな気持ちになった。稲刈りは、枯れた葉っぱが首筋や背中に入って痒くなる嫌な作業だった。

一方で、学校から帰ると公民館の前庭で、飽きもせず日が暮れるまでソフトボールに興じた。夏休みには川で友だちと毎日水泳を楽しんだ。ホタル狩りや魚つりもおもしろかった。秋祭りでは子ども相撲を取り、十円の小遣いをもらえるのが嬉しかった。冬は、自分で作った竹製のスキーで遊び、集落の坂道をツルツルにして、通りがかった近所のおばさんに叱られたことが懐かしい。

辛いことも楽しいこともあったが、ふるさとへの愛着と半ば長男としての義務感から、盆や正月には必ず帰省してきた。その上、両親が健在なころより、集落の共同作業や葬儀の手伝いなどには日程の都合をつけ、参加してきた。春、夏、秋の祭りの準備、農道や生活道路の補修、堤防の草刈りなど、およそ二か月に一回の頻度で行われる作業は、普段運動を余りしないサラリーマンには、そう楽な作業でもなかった。

父の死亡後は、一人暮らしになった母が高齢により使役に出られず、そのために肩身の狭い思いをしないよう、私がほとんどの共同作業に参加してきた。

今、ふるさとは約三十戸。この集落で暮らす人たちは素朴で親切、のんびりとしている。また、こつこつと物事に取り組む、粘り強い性格の人が多い。晩秋から冬の間、曇天、時雨、降雪と不順な天候が続き、我慢を強いられる土地柄のせいなのだろう。

その分、集落の運営や共同作業の仕方などは、時に少しまどろっこしく、メリハリがはっきりしないところがあった。私は、両親の代理にすぎないため口出しすることに遠慮があり、内心イライラすることもあった。

ある年の集落の総会に、いつものように母の代理で出席していた。集落の共有林の経営が赤字続きで、ここ二、三年の間に固定資産税も払えなくなる危機的状況にあることが分かった。そのまま放置すれば、年金で質素な生活をしている人たちが多いみんなに、新たな負担を求めるしかない。この苦しさをしのぐため山林を手放すといっても、早々に買い手のつく時代ではない。

「どうするのか」。それでも、みんなは「口を開けば損をする」とばかりに押し黙ったままでいる。

何分かの沈黙を経て、役員の一人が私に向かって、「三木さん、汗をかいてもらえませんか。皆さん、それでよろしいか」。私は、事前の根回しもなく突然のことでびっくりした。が、集落の人たちから人望のある役員の提案であり、これまでの恩返しになればとも思い、引き受けることにした。

私は共有林の経緯や赤字続きの理由について、ほぼ知識はゼロの状態だった。いろんな立場の人にその様子を、詳しく教えてもらうことから取り掛かった。

ようやく半年後、「新たな負担ゼロの解決策は、伐採に制限はかかるが、税負担のなくなる保安林の指定しかない」と総会に諮った。私の考えをやや押し付け気味ではあったが、何回もくどく念押しして、みんなの了承を得ることができ、なんとか役割を果たせた。

ある時には、集落の人たちの反応に「うーん、なんでなのか」と思わせられることもあった。私の実家が、国道の拡幅により立ち退きをすることになった。移転地として、既に不用となっていた旧公民館跡地を売ってもらうよう要望した。ところが、一部の役員はどうしてか、なかなかうんとは言わなかった。

私は、年老いた父母に代わり総会に出席し、丁寧な口調でひたすら売却のお願いをした。やっとのこと、ある老人が賛成の一声を上げてくれて、集落の人たちの同意が得られた。

確かに、父はみんなのなかで率先垂範するタイプではなかったし、母は愛想も余り言えず、人づきあいも少ないほうだった。そうではあるが、両親は、みんなからそんなに疎んじられていたのだろうか。それとも私への嫌味だったのだろうか。

下を向いて黙りこくり、誰かがことを運ぶのを待つような集落の人たちの消極性や、思いのほか小ずるく立ち回る性向、一部の人とはいえ垣間見えた底意地の悪さなどに、がっくりする思いだった。

翻って、集落の人たちに比べ、私が無欠の人間というつもりはさらさらない。サラリーマン時代、ふるさと近くの事務所に勤務したことがある。

その三年目。親しくもなかった知人は「あんたはもう神戸に戻って活躍した方がよい」と遠まわしな表現ながら真顔で告げた。「あんた、地元で評判があまり良くないよ」と、さすがにストレートには言えなかったのだろう。

「うむ」。私なりに地域の活性化に尽くしたつもりでいたが、それは全くの独り善がりに過ぎなかったのだ。

私は何事にも白黒をつけ、性急に結論を出そうとする性格である。子ども時分からのムキになりやすい短所は今も直っていない。このため、私に対する周囲の評価は好悪半々だろうと、かねてから自覚はしていた。

ふるさとへの郷愁がなお絶えることはない。だが、遠く田舎を離れ、近隣住民とも付き合いの希薄な新興住宅地で、自由気ままに暮らしてきたせいもあるのだろう。どうも集落の人たちと歩調が合いにくく、風土や習慣にも何か気持ちがそぐわなくなっている。多くのUターン者たちは、田舎で暮らす気持ちの折り合いを、どのようにつけているのか。

私は温順さに欠けがちで、老いとともに頑なさが増している自分の性格を、今さらのように反芻してしまう。結局は、性格的に独り相撲を取って、集落のなかで孤立してしまうのではないか。かねてより抱いていた懸念が、次第に確信に変わっていった。

私の心は帰郷するかどうか長く揺れてきたが、両親は息子の帰郷についてどう思っていたのか。改めて思い起こしている。

ふるさとには、実家や墓のほか、父祖の代から艱難辛苦を重ねて順次買い増し、大切にしてきた田畑山林がある。六人兄妹の長男として、ただひたすらこれらを守ってきた父。この地に嫁いで七十年以上が経ち、すっかり自分のふるさとになっている母。

父は、私がまだ三十代の頃、「若いうちは都会で暮らし、定年になったら田舎に戻ってくればよい」と言ったことがある。そして、私が街で家を買ったときも特に異論を差し挟むことはなかった。母は、私が今の家に住み替えたとき、「どんな家か見たい。でも、この田舎の家はどうなるのか」と、少し心配そうに尋ねたことがあった。

両親とも、私に直接「帰郷しろ」と強要したこともないし、「帰郷してくれ」と頼んだりもしなかった。けれども、「いずれ、いつか帰ってきてくれるのではないか」と思っている雰囲気を感じないでもなかった。

私たち夫婦は高齢期に入り、少し大きな病に罹るなど複数の持病を抱え、かかりつけの

大病院で定期的な検査が必要な身体になっている。

加えて、いつの日か大なり小なり世話になるであろう二組の息子夫婦が、車で一時間前後の神戸、大阪に住んでいる。私と妻は短期間とはいえ、両親の遠距離、週末介護をしてきた。この体験から、いざというときのためにも息子たちとこれ以上遠く離れることは避けたい。

あれやこれや逡巡してきたが、四囲の事情を見越して、このたび帰郷しないと決めた。さらに、古希を迎えた自分の体力や気力が年々低下することも予想され、今が実家を売却するタイミングであると結論を出した。

両親や祖父母の長年の労苦を思うと、申し訳ないとの気持ちもある。ふるさとを離れてしまう寂しさもある。時に両親の心情を思い出し、「本当に良かったのか」と自問することがあるのだろう。

そんな思いをよぎらせつつも、「ようやくけりがつけられ、ほっとした」というのが、私の嘘偽りのない現在の心境である。

ただ、ふるさとを離れることにしたが、依然として墓や田畑山林はふるさとにある。集落の人たちには、これまでの交誼にとどまらず、今後も何かとお世話になるに違いない。このことを忘れず、「やれやれ」と緩んだ自分を戒めながら、これからの毎日を過ごさねばと思っている。